



上橋菜穂子さん



# 2015 新春対談

## 物語が生まれる



▲文学の広場

のはなかなか難しい。それは、教師の皆さんが共通した評価基準を作らなければいけないからでしょうね。

**市長** 今、「ふるさと我孫子の先人たち」という副読本を作って授業してもらっています。うちのまちにはこんな人がいたとか、よそで自慢話ができる。我孫子の子もたちが中学校を卒業するまでに教えてほしいですね。

**上橋** 人が成長していく時に自分がどういう土地に育ってその中でどういう人々と触れ合って、そのことが自分をどう育てていったのか、世代が次から次へと思わぬ形で育んでいくってのは、私はとても大切なことだと思っています。今、市長がおっしゃったエピソードが子どもたちの心に触れた時に、やがて自分が育つだけではなくて、自分がまた人を育てようという気持ちになれたら素晴らしいなと思います。

**市長** どんな教育を受けてきたとか、周りの人たちとどういふふうに関わって、大人になつていくのがすごく大事だと思っています。その中で想像力とか、生きていくたくましさとかをうまく実体験として

経験するのも大切です。本を通して自分なりのイメージを作り、目標ができるというのは大きな意味があると思います。

**上橋** 人は自分の人生しか生きられませんが、他者がどういふ風に生きてきたかというのを想像できるように作家は書きますから、それをイメージしていただくことはとても大切だと思います。私が小さい時に祖母がたくさん昔話をしてくれました。この昔話には祖母が生まれ育った土地のことが出てくるんですが、そうしたさまざまなことまで子ども心に覚えているんです。こういう風にして物語に育まれていって、今度は自分で読むようになる、その中の主人公が葛藤していく姿を自分に重ね合わせて、「私はこう思っていたけど、こういう生き方もあるかもしれない」、「人ってこんな風に出会うことがあるんだ」というようなことを、物語を読むことで本だけにたくさん体験することができるとも思います。

**市長** 子どもたちがいろいろな本を読み、実体験ではないけれど想像力をふくらませるというのは大切なことだと思います。

**上橋** 私は大学の授業でよく学生たちと、本が嫌いな子どもたちとどうやって本を読ませるかという話をするんです。先生が読みなさいという子どもたちには勉強のような感覚になってしまふ。ゲームや漫画は自分の味方だけど、本は先生の味方になってしまふ。でも、小学校一年生に六年生の先輩が薦めると、すごく読むようになるそうなんです。私たちからすると一年生

も六年生と同じ子どもだと思いがちですが、一年生にとって六年生はカッコいい先輩なんです。だからその六年生にこの本面白かったよと言われると、「私も読んでみようかな」となる。こういう柔軟な発想ってすごい。しかも経験から出ている発想っていいなと思います。我孫子にも「めるへん文庫」<sup>※2</sup>がありますよね。子どもにとって想像し

### 想像する・夢を見ることの大切さ

**上橋** 私が国際アンデルセン賞をいただいたときにつくづく思ったんですが、夢は意外にかなうんだな。中学・高校の時なんかは、夢をいっぱい見たわけです。「作家になりたい」、「萩尾望都が大好き」とか思っていました。やがて、作家になって、その萩尾さんと一緒にご飯を食べたりできたわけです。そんなことが今起きてることに驚きます。女優の片桐はいりさんは、高校の時の同級生なんです。当時、一緒に文化祭の劇を作っていた高校生が、今では「あまちゃん」でまめぶ売っているわけです。夢は意外と子どもたちのところから芽生えていて、やがてそれが本当になう可能性があると実例を見てもらうことって、とても大切なことだと思います。継続は力なりではないですけど、決して嫌なことやっていたりするのは、やがて、やりたいことをやりながら、いろんなことを学びながら手を伸ばしていく。苦痛ではないんですね。やりたいため勉強ですから。心理学の本読んでも、哲学の本を讀んでも、強いられたいわけではなく、興味があるから読むわけ、それは身になります。本当の教育は実はそういうこと

たり夢を見ることって大切ですね。

この「めるへん文庫」のよに、子どもたちが書いたものが本になって、それを他の人が読む。そんな機会があると思うと、やってみようかなという発想につながっていくのではないかと思います。同じ子どもがやっていると、それは、すごくいい刺激になるような気がします。

**市長** 「めるへん文庫」も今基金が底をつきそうになっていまして。寄付というか協賛をいろいろと募っているんです。子どもたちの夢を何とか継続できるようにしたいと思っています。

**上橋** 国際アンデルセン賞もイエラ・レップマンという女性、第二次世界大戦の後に多くの戦災孤児たちが世界に満ちている状況の中、「子どもたちに何とか本を」というところからはじまった小さな芽が、世界中の人の心を打つていくんです。そういう意味でも、「めるへん文庫」の取り組みはとても大切なことだし、何か良いアイデアがあればと思います。

**市長** 先ほどの話ですと、おばあさんに本を読んでもらった

たりしたことが、自分で本を書いてみようと思ったきっかけですか。

**上橋** 私、小さいころからずっと頭の中にほんやりと自分がやがて物語を作る人になると思っていたんです。これは、聞かれる度に困るくらい他の道が頭の中になかったんです。いつだったと言われても分からないんです。ちなみに、最初に書いたのは『太郎の大冒険』でした。

**市長** 上橋さんのプロフィールを見ると、文化人類学でオーストラリアのアボリジニの研究をされているんですね。人類学の研究しながら小説を書くことが、どうも結びつかないんですが。

**上橋** まずは作家になりました。発想も大切なんです。ただ、物語は発想だけでもだめなんです。子どもたちの夢を叶える才能が自分にあるかどうか不安だったとき、エジソンの「天才とは1%のひらめきと99%の努力である」という言葉を知ったんです。それで、よし、天才にはなれなくても99%の努力はしてやろうと思えました。作家は多様な人間を物語の中で動かしてきますよね。



▲天神坂

※2 我孫子市めるへん文庫…子どもたちが創作活動に親しみながら、豊かな感性を育むことを目的に平成13年に創設。童話作品を全国の小・中・高校生から募集し、優秀な作品を表彰し、文庫化している。